

銅造燈籠

国宝

この銅合金製の燈籠は、816年に鑄造されたもので、東大寺にあるものに次いで、日本で2番目に古い燈籠である。813年に建てられた興福寺の南円堂に設置されて、おそらく昼夜問わず、仏陀に捧げる火を灯し続けていたものだろう。何世紀もの間に、頂上の宝珠はなくなり、部分的に新しく補修されてきたが、南円堂の初期から残っている唯一の遺物となっている。

この燈籠は日本中の仏教寺院の燈籠の原型となった。そして、数多くのコピーがつくられたので、「南円堂型」という呼び名が生まれたほどである。つくられた当時のパネルには、日本の偉大な学僧である空海（弘法大師、774～835年）が残した銘文が刻まれている。空海は日本の仏教の一派、真言宗の創始者として知られている。